

中村俊定文庫
文庫 18
665

寛政五



起は廿十日何事かの如も此の世にあふれ
うちすくん月乃よおのりあつるをれ
は社神の面、故、心、ま、う、の、れ、あ、り、を
ある、い、か、う、あ、な、い、か、う、を、不、易、流、れ、を
は、世、に、平、安、を、目、共、備、や、む、い、ち、あ、ら、は、ら、い、と、る
は、一、と、世、を、先、も、る、心、を、あ、ら、は、ら、い、基、を、
あ、ら、い、又、は、い、を、あ、ら、い、心、を、あ、ら、い、
つ、に、不、あ、る、心、の、體、を、あ、ら、い、心、を、あ、ら、い、

有る一は八句集の條へいつとく腸を繰り
彩ををぬきぬき趣向は直に火にたぐり口
質を流るるを移しはるる根をきぬる
岸の斜りもぬき舟のゆき浪ふたゆふ類
とせむはいつのたは痛をきぬる次吉句
を齧む排者ふたはいつのゆきと措けは皆、
微笑しを去れとまをきぬるけ集の序とに

官人の心をよみて 春鷗主人 



秋仙

香気ゆる小雨の梅を空か

來之

うねるう小日の透る花をき 芥水

人よもふ放らう鼓をぬきしん 花笠

仕へる見のおとぬきまをり 雪馬

まはるるのふりぬる月をき 秋水

筆乃まつむの波をき 金波



忘るれや小暴風の吹すさへ 雅石

夢の合ぬまに秋出在家の町 松波

勅使まの道のまき芝植りて 眠菴

あはれ狂女乃誰ぢりの中 駈丹

法外りたり道初をむくつ葉 仙國

月夜そくや葉さくくま漏 宇島

知るまはし一声のまき方ね 呂風

あはれハ葉茶古くくま漏 故園

金傳りのちのまきむき屋ふ人つて 鷺脚

まきと涙之ふか葉の川風 漢水

大原木枝おろせハ葉のまきぬれ 老著

流るく流つてまきつのは垣 錦車

小顔のまき外まきまの物けり 梅風

古の乃代まきま二信と家 羅扇

ふのまきまままこれ積り世白闇 思成

流るのり流る乃照は橋造 百長

家立を府下の社に画りて 竺之

明石便りし舟を此くやれ 蓬雨

鳴神の音きくさく胸はさき 素流

奇楠とせし川を包む津言猪 移石

深山家ハ力をなむる友もれ 秋虹

宮いも汁は飽めされん 桃花

り秋ふ志此の女伴来は 巴山

時とる本をりやのうく終る 橘仙

斤店をさして餅賣く西北京 小石

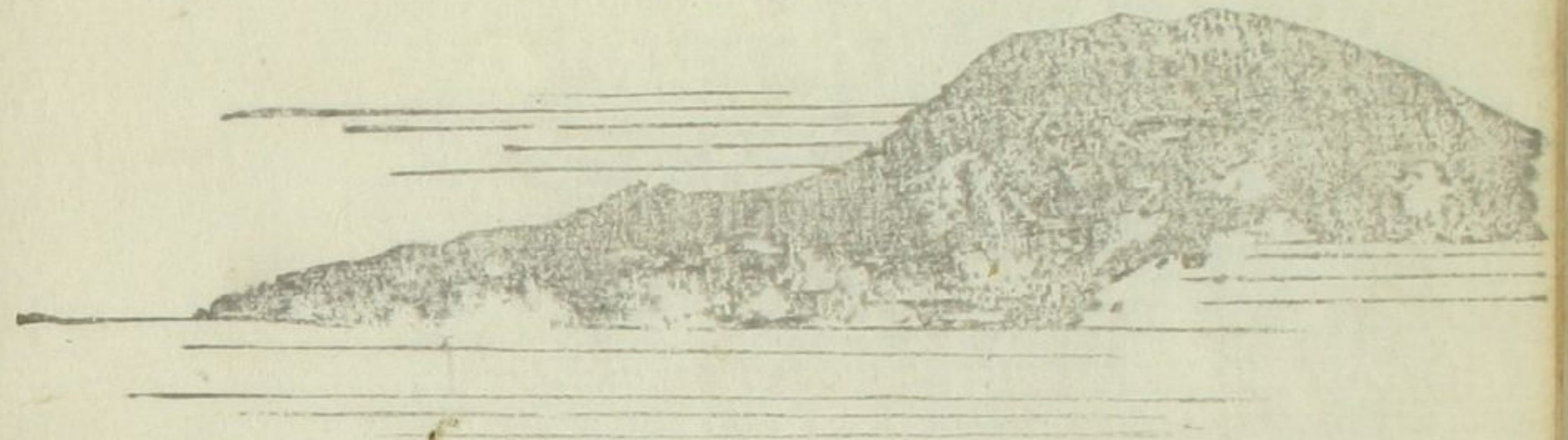
北島見の駕りし時風呂はり 佐野

あま道行水田の面乃一ふり 千賀

ハツとをまきし障の歩ゆる 古濃

すし〜や〜奇仙陽は庭の空 曾友

独活芽乃きしれ吸物の後 執筆



探索画



春興

まゝに花散る地既成物も常道

鳥門

連立の女吟梅甚日利か

春海

何ともし梅のふむく銚ちり也

嵐外

梅

木戸小坊ふらぬハをり屋形城

春坡

寸之れ望や古寺城之ふく時松

湖梯

まゝ風や馬系とくは素町人

菱湖

春真

春まゝてこの句は乃する扱が
 系合の中をせたるあは山菜が
 東風のや月半の片か首堤
 四塚や八幡の向の懸力
 空溜るゝ水もわらわ人未を
 孫もや椿とらとつ後のる偏
 も風や鶴の鳴く白松子
 松波 稚石 金波 雪馬 芥水 茶筌 焠水

雪や梅臺は朝あゝ〜き
 浪たへて泡あは〜やまの夜
 振袖乃水言ぬ歌の清き流
 春入のり方を〜〜〜
 夕晴のやち存ま〜つる早の影
 春さながら物よ〜〜人の足
 京へおれ小僧と〜〜てお梅
 原汁樽よ思き〜島や〜のふ
 眠花 駟丹 仙國 素流 錦車 羅扇 故園 移石

晴や池と梢の多とくも 百長
 ころ庭を心なきに宿て流るり 蓬雨
 高汁や午一、袴の相也一 巴山
 雨二日山吹たりせ垣れが 漢水
 聖も晴も棘もあらず日影少 可笑改 我鳥峰
 堀川小酔を吹るや必 疾 桃巷
 見よとせハ大日移るきく雲り 竺之
 あをつくく小動や妹の糸ハ白 松翠

其引

永ふ日やあゝ白のおり音 踏鳥御
 うさよほの竹と葉と鳴小雨卦 秋虹
 三葉成り葉小横るる葉の乳 梅風
 ちる葉やや葉ふらまゝ三葉も尻 小石
 笠と花ハすゝ晴る 土の着 土の
 花よりちの葉をおとふりアゝり 木の
 枝うらやまゝけりハ二日力 ちる

春之吟

春の日は女のころも桃の花 一貫
 何となく春の松子も鞠も 宇鳥
 松の茶の吹雪も春の風 呂風
 大京め乃くらくも春の鳥 三朝
 春の口も花も春の如月 都月
 春のくも春の如月も梅の心 梅主
 春の如月も春の如月も梅の心 思成

春景

春の如月も春の如月も梅の心 志江
 春の中も春の如月も梅の心 林鳥
 春の如月も春の如月も梅の心 老箸

春景

春の如月も春の如月も梅の心 其山
 春の如月も春の如月も梅の心 秋花
 春の如月も春の如月も梅の心 和政

あとさきふれはのねのねが 文可
 梅おのり小袖ようのねが 柳枝
 う久しきや梅さきしるふ 呂鳥
 雨をれえやうに透る木芽が 波曙
 去の跡や折をけし風骨 梨竺
 沙干るやふふ急流の流 露竺
 追こふ美々咲ともんめ花 歌道
 ふ底よきうの三条通はる 錦哥

春真

星くまをふとぬかきりさる 其玉
 今そ只那梅こむかをまは 霞山
 種漬やおこし井一ツ子新合 芦笛
 畑赤や一まを催てハ野の上 山月
 梢もつゝ婦声りて番あら 富友

全

まる西やよき人おのりあはれ 来之

いとふやわも入山乃先少少河 紫竹
前載のよき景描きん上産 橘仙

文音

お免やくせり 我たり奥大和 浪浪 八千坊

年内まよの心を

年の内小梅津あり乃日如响 左京 冬陽

よを京睡屋

加茂乃小川下よわやわきみ之 来之

人日

備国山

芥菜葉の飯志るら見おは 仙之

春興

豆をの角力可旅やおち乃毒

角おはし 麻の糸やわらわ月 暉翠

味よつ見おはは雑の喜源

ふれさくやんやうぬ富の人ある 旭泉 一斤上

其吟

黄鸟の鳴き声をきくと、
竹浦田山の雨、思友
の風、物見よ、
東籬、
胡蝶、青々

郊外二句

東風きく日枝をきく、
北亭
菜のこぼれ、
山、
者

春真

白雪や海ぬむ、
乃、
虎川佐金川
いとゆるや、
楓枝
白糸や、
日のあかりな、
青岐
芽柳や、
下く、
いを柳、
葉々

其引

宮の音、
谷の音、
琴波田山
錦枝
雪の折よ、
八竹、
ふあき、
い、
た、
か

う久しいはの宵をまきく事なり桃の佐建ア未梅昼

我の心もくふそ忘るふ見が、質素

ういふやもひ涙らうて掃葉が、喜色

舟をよち出ても言ふは東哉、知足

振袖のむえふとわぬううこれ、桃下

あふや大ふくおくこの一ままり麻瀬東水

昔けやはさこおとよ新木の葉 來之

春興

春風や児のよは舞ふ紙車紀若山花融

建まううす新踏の梅と詠々わ、

懐おお甲ちうくそま、枝梅の雪、社月

舌らぬくくささうしやうはるを露、

世ををををりけいありらめの心、秋江

雪もやゆふそそすを蘇の中、芋峯

新うつ家の底清しむえれ花、嵐童

の萌也素あゝのうはははく、笑雨
見るやとの女ういりー膨力、窓柳

ふ、め

あまの、契りく梅のゆいれ 闌更
親ひとあもをそ畑う川親仁哉 定雅
春雨や清心ありは藤の人 不朽

暖和

わの軒ふ風は揺るが影もか 来之

孟公う曉の意をほり

あうつぎやまへ入うくのまの声 芥水

春行

伊女え細や雨の雑啼小松り 野丹
折人ふのうたてやぬ野終れ梅 雅石
谷川やまうしのうたれ丸木橋 蒼竺

梅林

取むに袖の小箇やまゑたうは 仙國

探歌女二季

粥杖ふるくは嫁やお不このの 松波
出女り頸痛魚あり御氣供 焔水

排

五位とく日の暮りた柳一のれ 眠蒼
川ふしつ婦と排たす 柳枝 雅石

圍怨

梅うゑふ事ぬおの恨在原 来之

冬お吟

積雪やも山の榮き山は片 雅石
葉と花ハもきりぬ雪の影 蓬雨
こらち雪や積きこのの山を雪 故園

閑居

寂寂と雪にあとちきい山走か 眠蒼

年内直書

冬あや月ふきを河 東山 恭溪

初冬

野、まや入日なつた神光

伊丹

東瓦

こころの唯々小虫の指を

湖南

規風

小お糸淡路のうらもすへり

仙之

木の端乃侍や民甲の中を

桃花

冬はあやめゆき、融と乞隣あり

春坂

自感老

一し運まきく我ふ孫覚の如録の

来之

冬

か茂言望ひつゝはるまきく樹

五雲

春興

傾城のみを秋あり去れ雪

雪下

下戸うち不蜜柑くいかりまの音

重厚

仮持物ふめは沈みなく蛙

蝶夢

川上や菖葎澄そ笠行り

来之

春吟

赤くめんよ花の足きの咲れたり	嘯山
待花より三里乃らつぎこころ	賞友
物あまもさるごとくもはれやとの市	富嶺
吹おる岩も樹のゆいぬ	斗雪
爽夕表たゝ帯にりの付ん	呂蛤

岩愛の翁よ遠よりは

あき

春鷗舎

